

家族メンバーのやりとりが心的発達に与える影響 ——ビデオ録画データ観察解析で考察する対象関係論——

井 上 領

家族メンバーのやりとりが心的発達に与える影響

—ビデオ録画データ観察解析で考察する対象関係論—

井 上 領

目 次

| | |
|-----------------------------------|---------------------------|
| はじめに | 3-1 調査対象 |
| 第1章 研究史 | 3-2 調査場所・時期 |
| 1-1 母子関係研究について | 3-3 調査手続き |
| 1-1-1 精神分析学と母子関係研究 | 3-4 予備調査 |
| 1-1-2 ホスピタリズム研究 | 3-5 本調査 |
| 1-1-3 精神分析家とホスピタリズム研究 | 第4章 結果 |
| 1-1-4 Anna Freud-Melanie Klein 論争 | 4-1 家族の平均的な1日のやりとり |
| 1-2 精神分析学と母子の二者関係論 | 4-2 家族の平均的な1日の行動 |
| 1-2-1 J. Bowlbyの愛着理論 | 4-3 ストーリーラインと家族間のカテゴリー関連図 |
| 1-2-2 内的作業モデルからみた2歳児 | 第5章 考察 |
| 1-2-3 M.S. Mahlerの分離-個体化理論 | 5-1-1 Aと家族のやりとりからの考察 |
| 1-2-4 分離個体化理論からみた2歳児 | 5-1-2 Aの特徴的な行動 |
| 1-2-5 W.R. Bionのコンテイナー/コンテインドモデル | 5-2-1 母親とのやりとりの考察 |
| 1-2-6 コンテイナー/コンテインドモデルからみた2歳児 | 5-2-2 母親とのやりとりでの特徴的な行動 |
| 1-2-7 D.W. Winnicottの移行対象と中間領域 | 5-3 父親とのやりとりの考察 |
| 1-2-8 移行対象と中間領域からみた2歳児 | 5-4 姉、友達とのやりとりの考察 |
| 1-2-9 D.N. Sternの自己感の発達理論とスターン派 | 5-5 考察のまとめ |
| 1-2-10 自己感の発達理論からみたからみた2歳児 | 第6章 結論と今後の課題 |
| 第2章 目的 | 6-1 結論 |
| 2-1 本研究での目的 | 6-2 今後の課題 |
| 第3章 方法 | |

はじめに

今日の母子関係研究は、発達心理学だけでなく臨床心理学の世界でも重要なテーマであり、現在の心理療法の臨床現場においても、母子関係や生育歴の聴取は欠かすことのできないものとなっている。

*臨床心理学研究科 博士課程（前期）

発達心理学の分野では、「臨床的に仮構された乳児」の視点からではなく「観察された乳児」に焦点を当て、子どもの発達の視点から、その結果を臨床へと応用する研究がされている。また、現在ではメディアの進歩から母子関係の相互作用をビデオ記録から観察する研究もあり、河合・難波（2008）がマイクロ分析を用いて緻密なデータを抽出し、母子相互作用のパターンを分析する研究を報告した。

一方、精神分析学でのビデオ記録を用いた研究では、マイクロ分析を用いたD.N. Stern（1977）の乳幼児研究がある。この研究では生後六ヶ月間の母子相互交流をビデオ観察し、その結果から「4つの自己感」、「情動調律」の概念を打ち立てた。そしてその後Sternの理論を背景としたBeebe, B., Lachmann, F（2002）の母子間の相互交流調整の研究が続いた。この研究は心理療法のエビデンスが求められる現在、その議論の渦中にある精神分析（的）療法の機序と乳幼児期からの細かい観察による情動調律を比較検討し、その機序を明らかにしている。日本でこの分野のビデオ記録を用いた研究には、青木・馬場・古川（1996）の母子相互作用場面における母親の調律行動の研究がある。さらに青木ら（1996）は、今後のこうした母子治療の発展には、乳幼児の健全な人格形成において、母子関係のなかにある何が発達を促進し、また何が障害となるのかをより明確にして行くことが重要な鍵となると述べ、母子関係の観察研究の重要性を唱えている。

このように、自我心理学派および、スターンらの研究では実際に母子を観察したデータをもとに、自身の理論を構築し提唱しているが、対象関係論学派はその理論の機序を明らかにするために、事象を心理学的な研究法に基づいて観察したものは皆無に等しい。またメディアの大きな進歩によりビデオなどを使用した観察が盛んに行われるようになった現在でも、精神分析学の視点からビデオ録画に対する観察法を用いて、その理論の信頼性と妥当性を検討したものは少なく、特に対象関係論に着目した研究は皆

無に等しい。

ゆえに、精神分析の対象関係論に代表されるモデルが現在の子どもにも適合し、その信頼性と妥当性を説明できるかビデオ録画データ解析を用いて観察し、考察していくことが本研究の目的となる。

第1章 研究史

1-1 母子関係研究について

1-1-1 精神分析学と母子関係研究

母子関係研究が臨床心理学や発達心理学の重要なテーマとしてあげられるようになった背景にはS. Freudの創始した精神分析学とホスピタリズム研究がある。

繁田（1988）は、精神分析学は、神経症者の治療を通し神経症の成立機制に重要時期の親子関係の障害が重大な影響を及ぼしていることを認識し、一方のホスピタリズム研究も母子分離によって生じた子どもの発達障害を通して母子関係を認識しており、母子関係研究は発達障害の原因を親子関係に求めるという方向から始まったと述べている。

精神分析学の創始者であるS. Freudは、当初はそれほど母子関係を重視しておらず、重要概念であるエディプス・コンプレックスは父子関係の成立を重視する理論であった。しかし晩年のS. Freudはしだいに母子関係が極めて重大な意義を持つことを認識していく。S. Freud（1938）は『精神分析概説』で、子どもにとって母親は最初にして最強の愛情対象であり、母子関係はその後のすべての愛情関係に原型になるものであると述べている。また、小此木（2002）はS. Freudが精神分析を確率する前の著作『科学的心理学草稿』の中では、乳児の一方的なフラストレーションの生理的表出過程が、母親にとっては欲求不満を求める呼びかけとして、1つのコミュニケーションとして認知される事実も洞察していたと述べている。

1-1-2 ホスピタリズム研究

ホスピタリズムの問題は、母親から離れて乳児院、孤児院、病院などで過ごす乳児の死亡率が極めて高いことに悩まされていた欧米の小児科医たちから関心が集まり研究がなされるようになる。施設児の死亡率が高い原因は医学的管理や人工栄養の問題ではなく、父母がいないということに問題があると考えたアメリカの小児科医は、現在の里親保護のようなシステムをニューヨークで開始した。その後、子どもの死亡率が施設児と比較にならないほど低率であることが確認されたために、家庭的環境と十分な個人的看護が保証され、その影響に十分に注意をするなら子どもたちが救われることを主張した。またヨーロッパにおいても、医学的管理と同時に看護婦や保護者ができるだけ子どもと接触し、愛撫するという看護原則を確立していったことにより死亡率が低下し、身体的な問題も成長ホルモンの分泌不良によるものだと考えられるようになり、次第に解決の方向に向かった。このように身体的なホスピタリズム問題が解決の方向へ向かうにつれ、心理学者や精神医学者が施設児研究に取り組むようになり、その中にSpitzのような精神分析家も参加し、ここで精神分析学とホスピタリズム研究の流れを組む母子研究が邂逅することになる。

1-1-3 精神分析家とホスピタリズム研究

Spitzは精神分析学の学説を基礎に、当時ほとんど手をつけられていなかった乳児の対象関係と情緒性の問題の実証的研究に先鞭をつけた乳幼児心理学のパイオニアである（高橋, 2014）。

SpitzはS. Freudの弟子であるFerencziに師事し、精神分析を学び始め、Ferencziの紹介でS. Freudから直接教育分析を受けた。1938年パリの精神分析研究所の教授となり、「児童精神発達」の講義を担当したことから、乳幼児の直接研究の必要性を感じ、ウィーンで「発達心理学」を学んだ。そこで心理学統計法や乳幼児観察などの心理学研究法を習得し、16ミリカメ

ラで乳幼児の行動を記録する「映画-分析」の技法を創案した。Spitzの主な関心は、母親との情動的交流によって発達する乳児の対象関係であった。研究方法の特徴は、誕生直後からの乳児の行動をフィルムに収め、繰り返し観察することによって、乳幼児の微妙な表情や動作を捉える「直接観察法」を中心とした。そして、生後間もない乳児が母親と引き離された「母性剥奪」の状態で、どのような情動反応や行動を示し、それがその後の成長にどう影響するかについて、母性的養育の「部分的剥奪」の影響が強い保育所、「全面的剥奪」の強い孤児院で長期に亘る観察研究をした。上記した孤児院の施設児のようなケースがホスピタリズム研究にあたり、第二次世界大戦の影響での世界的な孤児の増加もあって世界保健機構（WHO）はこの問題を精神衛生面から研究することを提案し、ここでイギリスの精神分析学者J. Bowlbyにこの研究を委託することとなる。そしてその研究から母子関係が存在しないところに問題発生の原因があるとして、施設児の障害をマターナル・ディプリベーションという概念で説明し、ホスピタリズムの問題はこの大きな概念の中に包含されることになった。このマターナル・ディプリベーション研究の延長線上にアタッチメント研究があり（繁田, 1988）、母親との間に乳児が結ぶ情愛的なところの結びつきをBowlbyがはじめてアタッチメントという概念で説明（1969）し、後にその理論を体系づけた。

1-1-4 Anna Freud-Melanie Klein 論争

精神分析の母子関係にまつわる理論はAnna Freud-Melanie Klein 論争をきっかけとして発展をやっていったものが多くある。この論争は、A. FreudとM. Kleinの2人の女性の分析家による児童分析技法に関する論争であり、自我心理学とクライン派という精神分析の二大潮流の基礎を作りあげ、その中間派から形成された対象関係論を生み出した。これにより精神分析学の二者関係論の発展も進むこととなり、現代でも重要な概念の多くは、これらの学派の理論を基礎

として着想されている。ここではこの2大潮流の大きな違いについて説明する。

A. Freudは、S. Freudの発達理論を受け継ぎ、子どもは依存した存在であり子どもの超自我は現実の親とは切り離されていないとみなした。そのため、子どもの個体内の無意識を直接探求せず、子どもと外界との関係を重視し、子どもに対する教育的な措置や、外在する超自我である親への指示などの外的環境の改善によって外界との関係から子どもの治療をはかる。

一方、M. Kleinは、S. Freudの死の欲動を唯一受け継ぎ乳幼児の超自我がもたらす早期不安を死の本能という概念によって説明した(下司, 1999)。また、遊戯療法の観察を用いて幼児にさえ超自我およびエディプス・コンプレックスが見出せるとした。

A. Freudは子どもには精神分析そのものではないとし、親にかわる理想的な超自我として振る舞わねばならないとした。M. Kleinは、子どもは対象関係のある幻想の世界を生きていると考え、プレイセラピーを用いて精神分析をしたというところに大きな違いがあるといえる。H. Segal (1973) は、このKleinの幻想について、外界の現実のいかんに関わらず、幻想は本能欲動を満たすものが与えられないという外的現実に対するひとつの防衛とみなすことができ、また内的な現実に対するひとつの防衛であると述べている。

1-2 精神分析学と母子の二者関係論

1-2-1 J. Bowlbyの愛着理論

BowlbyはロンドンのTavistock Clinicで初期の母子関係について多大な研究成果を収めた精神分析家である。Klein派の分析家に教育分析を受け、またM. Klein自らがスーパーヴァイザーとなった。しかし、BowlbyはKlein派が軽視してきた「現実」の環境要素を重視することとなる。

Bowlby (1969) は、人は発達早期の愛着対象との相互関係から養育者と自己に関する心的表象を内在化し、これらの表象を後の対人関係

での作業モデルとして用いると提唱し、長期に渡る一貫した対人関係のパターンや対人情報処理の個人的特性を維持する心的表象を内的作業モデル (Internal Working Model) という術語で概念化した。このモデルは、乳幼児期、児童期、青年期という未成熟な時期に徐々に形成される。その中でもBowlbyは、特に生後6ヶ月から5歳くらいまでの比較的早期の段階を重視し、それ以降は漸次的にモデルは安定し可塑性を減じていくと考えた。

またBowlbyの愛着の概念を洗練する手助けとなったものにM. Ainsworthと彼女の同僚 (Ainsworth *et al.*, 1978) により考案されたストレンジ・シチュエーション法がある。これは、1~2歳児の愛着を測定するための実験室手続きである。乳児と養育者との間の短い分離エピソードが2つ含まれ、分離の間の子どもの行動および特にその分離から養育者と再会した際の行動を、「安定型」、「回避型」、「アンヴィバレント/抵抗型」、「無秩序/無方向型」の4つのカテゴリーに分類した。分離時の苦痛と再会による安心という安定型のパターンは、養育者が慰めてくれるという信頼感によって特徴づけられる内的作業モデルを反映していると考えられている。

1-2-2 内的作業モデルからみた2歳児

内的作業モデルは養育者と乳児のアタッチメント生成から成されるものであり、幼児に特定された期間の現象ではない。しかし、2歳児の愛着関係を確認するためには、上記した「ストレンジ・シチュエーション法」より分類されたタイプから発生する愛着システムが活性化したとき、どのように自他の行動をシミュレートし、安全感を得られるように自身の行動を計画しているのかを観察することで確認できると考える。母子間のアタッチメント形成が安定している場合は、分離時の苦痛と再会による安心という安定型をとると考えられるが、被観察児と母親との相互作用によっては、回避型やアンビバレント型を見せる可能性はある。その場面

を観察することで、現在の2歳児がどのようなタイプで、どのような内的作業モデルを構成させているのかを推察することができるだろう。

1-2-3 M.S. Mahlerの分離-個体化理論

Mahlerは小児精神病の研究から得られた「共生」と「分離-個体化」に関する仮説を検証すべく、健常児の発達プロセスの研究へと仕事を拡張し、ニューヨークにおいて大規模な長期縦断的観察研究に着手した。この研究の成果は、PainとBergmanとの共著『乳幼児の心理的誕生』(1975)に集大成されている。この研究は子どもが、母親がその場所に居合わせるなかでうまく機能していく一方で、いかにして分離した自己感覚、つまり、母親から分離した自己についての内的な感覚、自立したアイデンティティを達成していくかを見定めるために、乳幼児を直接観察したものである。この研究によって「分離-個体化」のプロセスにおいて重要な節目となる時期や段階区分が自我発達と絡めながら定められ、「未分期」、「分離個体化期」、「情緒的対象恒常性確立期」という3つの時期と「正常な自閉期」、「正常な共生期」、「分化期」、「練習期」、「再接近期」、「個体化期」という6つの段階が定められた。

またMahlerは「再接近期危機」と呼ばれる苦闘はその後の人生にも尾を引いていく根源的ジレンマとして捉えている。特に成人の「境界性パーソナリティ障害」の臨床では、この時期に危機があったことが原因と考え、この時期の母-子関係に注目した分析を行っている。

この研究結果は乳幼児精神保健の基礎的な発達モデルとして現在も様々な分野に影響を与えている(高橋, 2014)一方、Sternは、自身の観察研究の結果により、乳児は誕生の時点から母親を分離した存在として予め作られていることを明らかにし、自閉期と共生期の存在を否定した。このことについては、Mahler自身も認めている。しかし、J. Masterson (2000)は、児童の観察研究に着手し、子どもの自己意識、アイデンティティおよび自我構造の発達に対す

る母親の貢献の重要性を強調したことは、Mahlerの果たした重要な貢献であり、その理論は今日でも有効であることに何ら変わりはないと述べている。

1-2-4 分離個体化理論からみた2歳児

Mahlerの分離個体化理論からみた2歳児は再接近期にあたる。この時期はMahlerが最も重視した段階であり、P. Fonagy (2001)は現在のMahler学派ではこの時期がパーソナリティ形成に最重要期であると述べ、この再接近期を順調に経過できるか否かでその後の人格発達に決定的な影響を与えている。

この再接近期をMahler (1975)は「再接近期下位段階では、個体化が急速に進み、子どもは個体化を十分に遂行する一方、また、分離をますます意識するようになり、母親からの実際の分離に抵抗し、耐えるためにあらゆる種類の機制を用いる」と説明している。歩行ができるようになった幼児は自由に移動が可能となり、また言葉で自分の意思を伝える能力も身につけ始めることによって、急速に自律性を獲得していく。しかしそうした自律欲求の高まりと同時に母親との分離によって「母親の愛情」を失う恐怖も急激に高まり、強い葛藤に苛まれるようになる。この再接近期の中での母親との劇的な戦いによって、自分は壮大であるという幻想を苦しみながら次第に放棄しなければならず、「再接近期危機」と名付けられた。また観察児は2歳2ヶ月であり、再接近期と個体化の確率と対象恒常性のはじまりの段階の間にいると考えられる。また、この時期の女兒は母親に対する心の痛みや怒りの感情が芽生え、抑うつに陥りやすいとされる。

1-2-5 W.R. Bionのコンテイナー/コンテインドモデル

W.R. Bionは第二次世界対戦後から、主に統合失調症患者の精神分析素材から精神分析のオリジナルな論考を形にしていき、現在でもきわめて重要な概念を次々と提起した(藤山, 2010)。

『再考』（1967）では、パーソナリティの精神病部分と非精神病部分について、『精神分析の方法Ⅰ〈セブン・サーヴァンツ〉』（1984）では「コンテイナー/コンテインドモデル」の重要な概念である α 機能や α 要素、 β 要素などの概念を提唱した。牛島（2004）は、Kleinは、人生最早期の幼児期においては、処理困難な情動の処理方法の中で投影同一化という心理機制が主導的な役割を演じるとしたが、Bionはその切り捨てて外界の対象の中に投影される処理困難な情動が、母親関係の中でどのように処理されて健康な母子関係の形成を可能にしていくかを説明しようとし、到達したのがこのコンテイナー/コンテインドモデルであると述べている。このモデルについて松木（2009）は、幼児の中の欲求不満に満ちた自己の部分は耐えることができないために自分から切り離して母親に投げ込まれるが、現実の母親はその意味を理解し、幼児が理解できる状態にして返す、そして取り入れることができた幼児は意味のある経験として自分の中に保持していくと説明している。こうした母親の機能を α 機能よび、幼児がここに取り入れられたものを α 要素、ここに拠って消化されていない事実を β 要素とよぶ。このモデルは、Kleinに代表される対象関係論の母親と乳児の内的交流、内的対象としての母親/乳房との交流という概念をアップデートし、母子関係と精神分析関係の本質を抽出した具体性と象徴性を兼ね備え、かつ外界と内界を包括する二者間の交流モデルとして提示された。

1-2-6 コンテイナー/コンテインドモデルからみた2歳児

言語を獲得した2歳児は、非言語的のものよりも言語を使用したコミュニケーションが活発になる時期であると考えられ、言語を使用したコンテイナー/コンテインドのやりとりが家族間でなされていることが推察される。園田・無藤（1996）の研究では、母子相互作用における内的状態への言及がされており、この相互作用における母親の内的状態への言及は、後の子ども

の内的状態への言及を予測し、さらに子どもの内的状態への言及は後の子どもの他者理解を予測することが示唆されるとしている。母親の α 機能により α 要素を取り入れていく構造と、この2歳児と家族間の内的状態の言及を観察することで、コンテイナー/コンテインドモデルが機能していることが観察できると考えられるだろう。

1-2-7 D.W. Winnicottの移行対象と中間領域

Winnicottは、第一次大戦後、医師資格を取得したその後、1923年にJ. Stracheyとの精神分析を始め、パディントン・グリーン小児科の内科医になった。また彼からM. Kleinを紹介されると、スーパーヴィジョンを6年間受けた。1940年代の終わりころまではKlein派の重要なメンバーと見なされており、ベーシックにはKleinの考え方の範囲の中での論文であったが、1951年に発表した、論文「移行対象と移行現象」でKleinの同意が得られなかったために決別することとなった。

Winnicott（1971）は、「移行対象」や「移行現象」という用語を導入したことについては体験の中間領域を表すためであり、それを親指とテディベアのあいだ、口唇的性愛と本当の対象関係のあいだ、恩義への一次的無自覚と恩義を認めることとのあいだの体験の中間領域としている。この中間領域は「錯覚」であり、乳幼児には許されるものであるが、成人の生活では、芸術や宗教の中に備わっているものである。また、移行対象の性質について、移行対象という「本来の我ではない所有物」の使用には男女の間に目立った差はなく、1枚の毛布が乳房のような部分対象を象徴していることは確かであるが、実在性が重要であるとも述べている。（藤山消える）

またWinnicott（1977）は「一人でいられる能力」が情緒発達の成熟度を示す重要な指標であると述べている。これは現実には1人であることを論じているのではなく、この能力は「幼児

のとき、母親と一緒にいて一人であったという体験」を指している。

これは幼児と一緒にいる母親または母親代理者(乳児ベッド、ベビーカー、身の回りのもの)との特殊な関係を指しており、ウィニコットは「自我の関係化」という用語を用いている。自我を支える環境が取り入れられ、個人の人格の中に組み込まれると、「一人でいられる能力」ができあがる。これは実際に母親またそれと同等である人物が人生早期に一時的に幼児と同化し、しばらくは自分の幼児の育児以外に何の関係も持たない人物が必要になる。これをウィニコットは「原初の母性的没頭」という概念で説明している。

1-2-8 移行対象と中間領域からみた2歳児

Winnicott (1971) は移行対象の発現時期として、生後4ヶ月、6ヶ月、8ヶ月、12ヶ月までに現れると曖昧な表現をしているが、遠藤(1990)の研究では1歳前後に比較的大きな、そして2歳前後に大きな発言のピークがあることが述べられている。よって、2歳は第2ピークの中にいると考えることができ、移行対象を観察できる年齢と推察できるだろう。対象になるものとしては、毛布に対する愛着が1歳前後で始まり、2歳になると人形やぬいぐるみに対しての愛着へと変わる。しかし、同研究では日本での移行対象の発現率は38%となっており、日本では欧米に比べて移行対象の現象が確認されないことが述べられている。

また「原初の母性的没頭」の時期を大きな危機もなく子どもが通過していると、「一人でいられる能力」を獲得しており、このような現象が観察できることが推察される。この概念は、単に孤独に耐えられる能力を意味しているのではなく、本来は「ひとりだけでふたりでいる(内的な環境としての母親を利用できる)ことと同時に、ふたりでいて(そばに外的な対象がいるときに)ひとりになれる(くつろぎの空間を内界にもてる)こと」(藤山, 2002)であるとされる。

1-2-9 D.N. Sternの自己感の発達理論

Sternは、スイス在住の精神分析家であり、現代を代表する乳児発達の研究者である。「臨床乳児」(精神分析の発達理論に基づき週及的に導入された知見)と「被観察乳児」(発達心理学の研究において乳幼児の行動観察から見出された知見)を統合し、乳児の主観的体験世界を、「自己感」の概念を軸に描き出した。松岡(2019)はこの実証的アプローチは既存の臨床心理学理論に説得力を与えるものであり、心理学研究においてエビデンス・ベースな知見が求められる現状を鑑みてもなお新鮮さを失っていないと述べている。

Stern (1985) は、1970年代以降の乳幼児発達心理学の諸研究の知見を視野に入れながら、誕生直後から言語の出現辺りまでの乳幼児の自己感の発達を論じている。そして乳児は、出生直後から母親との交流のなかで、体験の主体としての自己感を発達させると述べている。自己感とは、日常体験を絶え間なく主観的に組織化し加工処理する作用が備わっており、こうした組織化の主体こそが自己感であると定義しており、その各々はそれぞれに異なった自己-体験の領域と社会的かかわり合いを有している。Sternは、出生後の「自己感」の発達領域を4つに区分し、それを「新生自己感」、「中核自己感」、「主観的自己感」、「言語的自己感」と概念化し、総称として「4つの自己感」とした。この自己感の4領域が最早期より漸次的に創出される中で、総体的な自己感が立ち上がるというモデルが考えられており、それぞれの自己感は相互に作用しつつも一生涯作動し続けると想定されている。

1-2-10 自己感の発達理論からみたからみた2歳児

4つの自己感からみた2歳児は「言語自己感」にあたる。この「言語自己感」は言葉が話せるようになって現れるものである。この年代になると、乳児は自己を客観視できる能力、象徴を用いた遊びができる能力、過去の記憶や今の現

実に加えて将来への期待や、現実に反してこうあって欲しいという願望を抱き、維持できる能力を獲得する。言語自己感が出現しても、それまでの3つの自己感も活発に活動を続ける。

ところが言語化されるのはそれらの領域における非言語的総括的体験の1断片のみのため、体験は言語により変形され、もとの総括的体験から切り離されたものとなる。非言語的体験は潜行して言語化された体験のみが公式の体験となる。

言語の発達はそれまでの自分だけのものであった乳児の個人的知識や体験は、「語られたもの」として他者との間でその意味を共有できるようになる。言語は他者と共にある在り方を広げる代わりに、自己の体験の分裂を起こす。

第2章 目的

2-1 本研究での目的

本章で示してきたように、自我心理学派および、スターンらの研究では実際に母子を観察したデータをもとに、自身の理論を構築し提唱している。対象関係論学派は、乳幼児観察という治療者訓練カリキュラムはあるものの事例研究が主体となり、その理論の機序を明らかにするために事象を心理学的な研究法に基づいて観察したものは皆無に等しい。またメディアの大きな進歩によりビデオなどを使用した観察が盛んに行われるようになった現在でも、精神分析学の視点からビデオ録画に対する観察法を用いてその理論の信頼性と妥当性を検討したものは少なく、特に対象関係論に着目した研究は皆無に等しい。

ゆえに、これらの代表的なモデルが現在の子どもにも適合し、その信頼性と妥当性を説明できるかビデオ録画データ解析を用いて観察し、考察していくことが本研究の目的となる。

これまで示してきたように、精神分析の概念には多くの母子関係を取り扱うモデルがある。Mahlerの分離-個体化理論では、母親がその場所に居合わせうまく機能していく中で、子どもが

分離した自己感覚、つまり、母親から分離した自己についての内的な感覚、自立したアイデンティティを達成していくモデルであり、Winnicottの移行対象は、母親と共にある中で移行対象（毛布や人形など）を用いていかにして自己を発見し、母親との分離を成功させるかというモデルである。そして、これらの代表的なモデルが現在の子どもにも適合しており、その信頼性と妥当性を説明できるかビデオ録画データ解析を用いて観察し、考察していくことが本研究の目的となり以下の手続きを踏んだ。

第3章 方法

3-1 調査対象

観察者の親族関係にあたる子どもA(2歳2ヶ月)とその家族である母(31歳)、父(33歳)、姉(4歳)と友達1名である。

3-2 調査場所・時期

2021年6月から8月の間に観察者の親族であるA自宅で観察調査を行った。

3-3 調査手続き

観察研究の依頼についてはコロナ禍による緊急事態宣言中であったために、直接あって口頭での説明を控え、Aの母親と直接電話でコンタクトを取った。その際に本研究の旨を簡単に伝え、前向きに検討をいただけたので、承諾書(資料1)、研究協力同意書(資料2)、ビデオ撮影調査参加承諾書(資料3)をA宅に郵送した。

後日、調査実施にあたり郵送した資料3種類を調査者が電話にて読みながら説明し、また本研究の詳しい説明も行った。A父とも相談してもらった上で研究内容に了承をいただき署名・捺印をもらった。承諾書3種類は調査者に再郵送してもらい、署名・捺印の確認がとれたところで、Aの1日の様子を記入するための予定表を制作し、3週間分をA宅に郵送した。

母親より記入してもらったAの典型的な3週間分の行動予定表(資料4)を郵送にて受け取

り、全時間見本法から子どもの1日を観察するために、典型的なAの1日を抽出。次に、行動予定表と母親のインタビューから、1日の行動にイレギュラーな出来事が起こりにくい水曜を観察日とすると仮定した。そして実際、水曜日に行動予定表通りのスケジュールをAが行っているのかを確認するために、起床から就寝までの1日を撮影した（ビデオカメラは「SANYO CG6 Xacty」2台を用い、SDカードにその映像記録した）。ビデオ録画観察から行動予定表の水曜日のA児と家族のやりとりに大きな差異がないことが確認できたので、本調査の日程を水曜日の起床から就寝までの時間と設定した。

3-4 予備調査

母親からAの発達の過程などをインタビューし、子どもの起床から就寝までの活動を行動予定表に記入して提出してもらった。また、この研究はビデオ撮影者が入る参与観察になるために事前にA自宅に赴き、家族ともにラポールを形成し、ビデオを持った観察者が家庭に入ってもリラックスした雰囲気の中で撮影を行えるように、本調査と同等の撮影セッティングのもとAの1日の行動を観察した。セッティングはハンドカメラでの録画、そして食卓に固定カメラを設置した。

1日観察したものと行動予定表の水曜日のAと家族のやりとりに大きな差異がないことが確認できたので、本調査の日程を水曜日の起床から就寝までの時間と設定した。

3-5 本調査

行動予定表と観察から得た情報から観察実施時間を設定し、その設定された時間を2日半に渡り記録した。データを第二研究者と共に視聴し、家族間で行われているやりとりを確認し、KJ法を用いて概念カテゴリを制作した（資料5）。さらにそこから、各概念をグルーピング（A型）し、やりとりの島を制作し、家族間の行動の流れを文章化（B型）した。

(1) 家族の相互作用のカテゴリ抽出

観察日とした水曜日にA宅でビデオ撮影を2日半行い、その各ビデオデータを設定したタイムスケジュールに適合するよう組み替えた。全時間見本法を用いてA家族の各々の行動（以下アクション）を抽出するために、ビデオから観察される行動を記述、番号化し、1アクションの行動を平均3秒として計測した。抽出したアクションをKJ法を用いてカテゴリへ分類。その結果、17のカテゴリへ分類した。またその観察されたビデオデータを番号とともに記録した（資料6）。以下結果に示す。

(2) 家族の平均的な1日の行動

抽出した大カテゴリを用いて、家族間におけるやりとりのカテゴリとその頻出順、そしてその行動の時間をまとめた。以下結果に示す。

(3) カテゴリー関連図制作とストーリーライン制作

家族間の相互作用を、グルーピングし、その家族の行動、やりとりの流れを文章化した。以下結果に示す。

(4) 考察

制作した、カテゴリー関連図（図2）とストーリーラインから、5つの精神分析概念から考察した。

第4章 結果

4-1 家族の平均的な1日のやりとり

表1の集計結果より、1日のうち頻繁に相互作用が行われる時間は5. 昼食（姉、母）の132回と7. 夕食（母、父、妹）の74回とどちらも食事の時間であることがわかった。これは食事の中の<B: 要求>と<K: 自発的な活動>が発現に行われているためである。また次点では、4. お友達と遊ぶ時間（母、友人母以下ママ友、友達）であり、こちらは<B: 要求する>、<I: 一緒に遊ぶ>、<J: 介入する>が頻繁に行

表1 家族の平均的な1日のやりとり

| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | 合計 |
|----------------------|----|------|------|-----|------|------------|------|-------|-------|------|--------|-------|----|-----|-------|---------|---------|-----|
| | 拒否 | 要求する | 注意喚起 | 褒める | 返答する | (言われて)行動する | 質問する | 一人である | 一緒に遊ぶ | 介入する | 自発的な活動 | 真似をする | 注視 | 教える | 呼びかける | 喧嘩する/争う | 運動/活動する | |
| 1.朝パズル遊び(母、父、妹) | 2 | 7 | 1 | 2 | 3 | 5 | 0 | 1 | 3 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 29 |
| 2.朝絵本読み(父) | 1 | 4 | 2 | 0 | 2 | 0 | 7 | 1 | 13 | 0 | 3 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 34 |
| 3.幼稚園送りまでの時間(家族全員) | 6 | 6 | 0 | 0 | 4 | 2 | 1 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 26 |
| 4.幼稚園送迎(母) | 0 | 4 | 0 | 1 | 4 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 18 |
| 4.お友達と遊ぶ時間(母、ママ友、友人) | 5 | 12 | 0 | 1 | 4 | 1 | 3 | 2 | 10 | 9 | 0 | 3 | 3 | 2 | 5 | 7 | 2 | 69 |
| 5.昼食(姉、母) | 2 | 23 | 4 | 4 | 6 | 10 | 5 | 1 | 10 | 8 | 17 | 5 | 11 | 12 | 4 | 10 | 0 | 132 |
| 6.遊びの時間(姉、母) | 1 | 3 | 4 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 4 | 4 | 5 | 1 | 1 | 1 | 0 | 33 |
| 7.夕食(母、父、妹) | 4 | 12 | 2 | 3 | 4 | 6 | 2 | 0 | 7 | 3 | 13 | 2 | 7 | 7 | 1 | 0 | 1 | 74 |
| 8.夕食後(家族全員) | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 8 |
| 9.就寝前絵本(母) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 |
| 合計 | 21 | 73 | 13 | 11 | 32 | 29 | 22 | 7 | 47 | 25 | 42 | 17 | 29 | 24 | 15 | 18 | 4 | 429 |
| 順位 | 11 | 1 | 14 | 15 | 4 | 7 | 9 | 15 | 2 | 6 | 3 | 12 | 5 | 7 | 13 | 9 | 17 | |

われている。またAの1日では、主に2.朝絵本読み(父)と4.お友達と遊ぶ時間(母、ママ友、A友人)の時間で<I:一緒に遊ぶ>のカテゴリ数が多く、日常で誰かと遊ぶ行為は主に父親と午前中にA宅に尋ねてくる友人との間で行われている。しかし6.遊びの時間(姉、母)の時間では、<I:一緒に遊ぶ>よりも、<M:注視>や<E:返答する>、<L:真似をする>という活動が多く見られ、一方、Aと母親の2人だけで過ごせる時間は、4.幼稚園送迎(母)の帰宅時しかなく、ほぼ1日、家族メンバーの三者関係以上の相互作用の中で過ごしていることがわかった。また、<D:褒める>は11回と少ない結果になっている。

4-2 家族の平均的な1日の行動

表2からは、Aは、<B:要求する>、<I:一緒に遊ぶ>、<K:自発的な活動>、<M:注視>の活動が多く、母親は、<B:要求する>、<J:介入>、<N:教える>、父親は<I:

一緒に遊ぶ>、<B:要求する>、<N:教える>、姉は<P:喧嘩する/争う>、<B:拒否>が目立って多いカテゴリとなった。家族メンバーの上位カテゴリをまとめると、表3のようになり、子どもはB>I>K>M>F>A、母親はB>J>N>E>G、父親はI>B>N>E>G、姉はP>A>Kという形で表すことができる。

4-3 ストーリーラインと家族間のカテゴリ関連図(図2)

家族の平均的な1日のやりとりのカテゴリー関連図を作成し(図2)、そこからストーリーラインをした。その結果から、Aと家族におけるやりとりは、主に【食事の時間】と【遊びの時間】に集中している。家族全体では<B:要求する>、<I:一緒に遊ぶ>、<K:自発的な活動>が活発に発生している。この中で、Aが<B:要求>や<I:一緒に遊ぶ>をすると、家族がそれに合わせたやりとりをするパターンが多くみられ、(表4)と(図1)からも1日を

表2 家族の平均的な1日の行動

| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | 合計 |
|----|----|------|------|-----|------|------------|------|-------|-------|------|--------|-------|----|-----|-------|-----------|-----------|-----|
| | 拒否 | 要求する | 注意喚起 | 褒める | 返答する | F（言われて）行動す | 質問する | 一人である | 一緒に遊ぶ | 介入する | 自発的な活動 | 真似をする | 注視 | 教える | 呼びかける | 喧嘩する / 争う | 運動 / 活動する | |
| A | 17 | 46 | 8 | 0 | 15 | 18 | 6 | 7 | 36 | 0 | 35 | 14 | 25 | 2 | 11 | 12 | 4 | 256 |
| 母親 | 2 | 21 | 3 | 10 | 12 | 8 | 12 | 0 | 4 | 18 | 3 | 1 | 2 | 17 | 4 | 1 | 0 | 118 |
| 父親 | 0 | 6 | 2 | 1 | 5 | 3 | 3 | 0 | 7 | 4 | 2 | 0 | 1 | 5 | 0 | 0 | 0 | 39 |
| 姉 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 5 | 0 | 12 |
| 友達 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 合計 | 21 | 73 | 13 | 11 | 32 | 29 | 22 | 7 | 47 | 25 | 42 | 17 | 29 | 24 | 15 | 18 | 4 | 429 |

表3 家族の平均的な1日の行動 頻出カテゴリ抽出表

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|----|---------|---------|----------|--------|------------|------|
| A | B 要求する | I 一緒に遊ぶ | K 自発的な活動 | M 注視 | F 言われて行動する | A 拒否 |
| 母親 | B 要求する | J 介入する | N 教える | E 返答する | G 質問する | |
| 父親 | I 一緒に遊ぶ | B 要求する | N 教える | E 返答する | J 介入する | |
| 姉 | P 喧嘩をする | A 拒否 | K 自発的な活動 | | | |
| 友達 | J 介入する | L 真似をする | | | | |

通してのこのカテゴリの活動時間が多いことが見て取れる。また特筆することとして、誰かと一緒にいても関わりを持たずひとりで何かをしている時間<H：一人である>もみられた。

母親は【食事の時間】でのやりとりが多く、Aの行動に対して<N：教える>、<J：介入する>、<G：質問する>で対応している。それは主に教育的指導のためであり、現在のAとの関わりを中心になっている。また母親に多く認められる<D：褒める>は、このような教育的指導の中で行われていることがわかる。

父親は、コロナ禍による在宅勤務（テレワー

ク）時間が大きく増えたことと関係して、Aと【食事の時間】と【遊びの時間】が増え、この時間が習慣化している。このことから、朝の時間には父親と遊ぶ時間（2.朝の絵本読み）が設けられており、よって<I：一緒に遊ぶ時間>が多くみられた。遊びの中では、<J：介入する>が少なく、Aのペースの中で遊んでいる様子が観察された。【食事の時間】は、母親と同様に教育的指導のために関わっていることが多い。

また姉に対しては、【遊びの時間】の中でも<I：一緒に遊ぶ時間>がなく、観察する姿<M：注視>や模倣する姿<L：真似をする>が

表4 家族の平均的な1日の行動（カテゴリの行動時間①）

| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | 合計 |
|-------|----|------|------|-----|------|------------|------|-------|-------|------|--------|-------|----|-----|-------|-----------|-----------|------|
| | 拒否 | 要求する | 注意喚起 | 褒める | 返答する | F（言われて）行動す | 質問する | 一人でいる | 一緒に遊ぶ | 介入する | 自発的な活動 | 真似をする | 注視 | 教える | 呼びかける | 喧嘩する / 争う | 運動 / 活動する | |
| A | 63 | 138 | 24 | 0 | 45 | 54 | 18 | 21 | 108 | 0 | 105 | 42 | 75 | 6 | 33 | 36 | 12 | 780 |
| 母親 | 6 | 63 | 9 | 30 | 36 | 24 | 36 | 0 | 12 | 54 | 9 | 3 | 6 | 51 | 12 | 3 | 0 | 354 |
| 父親 | 0 | 18 | 6 | 3 | 15 | 9 | 9 | 0 | 21 | 12 | 6 | 0 | 3 | 15 | 0 | 0 | 0 | 117 |
| 姉 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 6 | 3 | 3 | 0 | 0 | 15 | 0 | 36 |
| 友達 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 6 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 12 |
| 合計(秒) | 21 | 219 | 39 | 33 | 96 | 87 | 66 | 21 | 141 | 75 | 126 | 51 | 87 | 72 | 45 | 54 | 12 | 1245 |

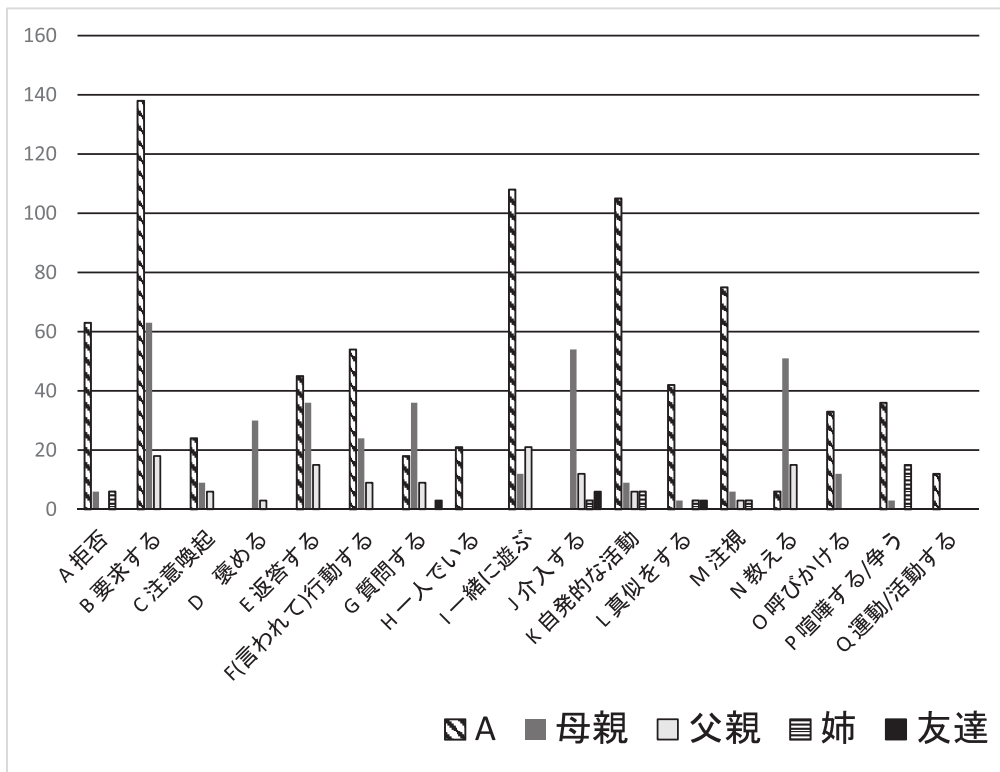


図1 家族の平均的な行動（カテゴリの行動時間②）

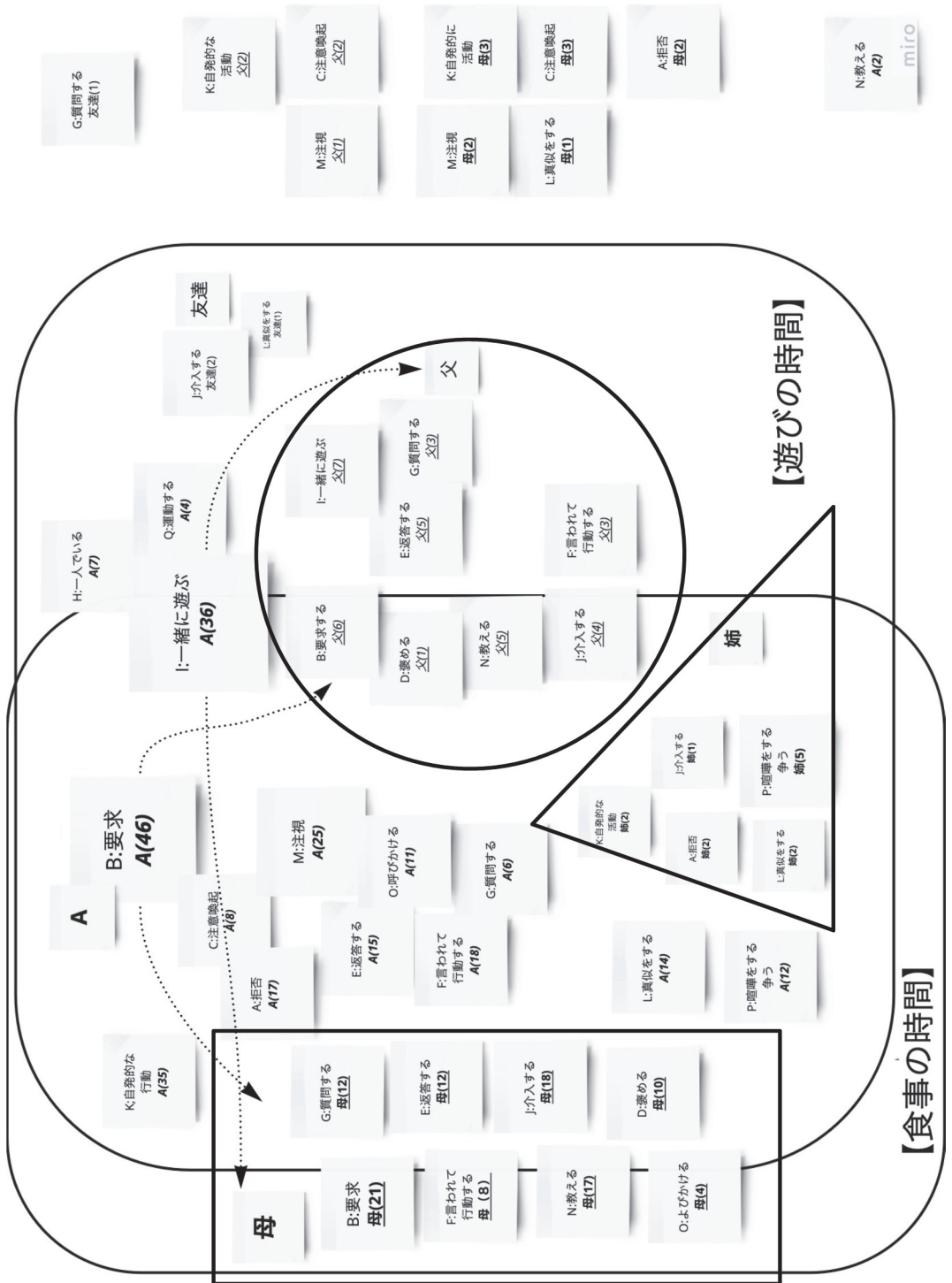


図2 家族間のカテゴリ相関図

みられた。日常の中では母親や父親よりも、姉の行動を観察し、模倣をしていた。姉はこのAのかかわりには積極的に関わろうとしないが、Aの行動が気に入らないときなどに喧嘩や争いに発展した。

友達とは、【遊びの時間】の中で一緒に遊んでいるように見えるがお互いに自分の好きな遊びを始めており、お互い単独行動をしている。何かに気がついた時に、<J: 介入する>があり、衝突があった。姉と友達のかかわりには共通して所有物をめぐる<P: 喧嘩をする/争う>が観察された。

第5章 考察

5-1-1 Aと家族のやりとりからの考察

この家族のストーリーラインから、Aは【食事の時間】と【遊びの時間】に母親と父親とのやりとりが多い事がわかった。この2つの時間で、Aは<B: 要求>、<I: 一緒に遊ぶ>の2カテゴリを中心としてやりとりをスタートさせており、そのなかでも主に言語を用いた<B: 要求>が多い(138回)。ノンバーバルでの要求(262)(347)(349)も行われているが、頻繁には確認できない。その他のカテゴリもノンバーバルでの伝達は明らかに少なく(6回)、やりとりの多くは言語を用いていることが観察された。また<I: 一緒に遊ぶ>が発生すると母親と父親は<B: 要求する>(16)<C: 注意喚起>(10)(36)(52)<D: 褒める>(289)<N: 教える>(272)という反応を、言語を用いてやりとりしていた。遊びの中にも、言語による教育的指導という側面が多く見られており、ゆえに言語的な応答によるやりとりが多い

ことが推察された。中には、親からのノンバーバルなやりとり(18)(234)(335)もあるが全体を通してみると極端に少なく(3回)、このことから現在のAの日常的なやりとりは、ほぼ言語が用いられていると考えてよいだろう。

このことから、この家族間のやりとりは言語的な応答が最も頻繁に行われており、ゆえに現在のAはD.N. Sternの4つの自己感の「言語自己感」の概念に適合していると推測できる。Stern(1985)は「言語自己感」について、生後2年目に入り言葉が話せるようになると、自己感と他者感は新しい属性を獲得し、言葉という新しい交流手段によって、互いに意味を共有するとともに、それぞれ個別で個人的な世界認識を持つようになると述べている。これは、Aと母親と父親の以下のやりとりから考えることができるだろう。(やりとり1)

このやりとりは、【食事の時間】での昼食でトマトを食べているシーンと夕食でのシーンより抜粋したものである。Aは自己に感じたことを母親、そして父親に直接伝え、そのあと両者はその言葉の意味を理解してAに伝えている。これは言語を獲得する以前には存在し得なかった意味を、言語を用いて、お互いに体験し所有していることと推察でき、これは「言語自己感」での他者と共にある状況であることが推察できる。

次に、【遊びの時間】の中での、Aと母親と父親の言語的やりとりから以下の考察をしていきたい。(やりとり2)

このやりとりは、【遊びの時間】でのAがパズルで遊んでいるシーンと父親と幼児用の英語教材で遊んでいるシーン抜粋である。Aが<I: 一緒に遊ぶ>行動を取ると、母親と父親は言語による<C: 注意喚起>(10)や<N: 教える>

(やりとり1)

- | |
|---------------------------------|
| A/E (179) 「甘い」と母親に伝える |
| M/D (180) 「甘いね～」と母親は子どもの言葉を繰り返す |
| A/E (363) 父親に美味しいと伝える |
| F/E (364) 父親は「おいしい？」と語りかける |

(36) で対応している。また<I：一緒に遊ぶ>に連動してそのまま遊びに入ったり (40), その行動を褒める (289) (385) といったことが観察されたが, このやりとりも言語による交流である。このことから, 【遊びの時間】も言語的応答の中でのやりとりがなされていることがわかる。また, この言語の使用に関しては発達教育として, 親が意図的に言葉を多用していることも考えられ, 「言語自己感」との関連が大きいことが示唆された。

ここでまた, 【遊びの時間】に関してもう一考察してみたい。Aが<H：一人にいる>というカテゴリの行動に注目してみると, 一緒に遊んでいるように見えるが遊んでいないという状況 (117) ~ (120) が観察された。その様子は, 遊びに没頭しており, 他者とのやりとりがしばらくない状態である。またしばらくその遊びに集中したあとには母親を呼んだり, 求めたりする行動が観察された (122) (123)。これを, Winnicottの中核概念である「遊ぶこと」の理論, 「移行対象」, 「一人でいられる能力」から考察してみたい。

これ(やりとり3)は, 【遊びの時間】での友人と一緒にビニールプールで遊んでいるシーンからの抜粋である。遊びはじめには友達と話をしたり, おもちゃを共有して遊んでいたが, しばらくするとプールの中で2人は遊んではい

るが相互のやりとりのない時間が現れた。ここでは, お互いが好きな遊びを集中している様子が観察されている。Aのバケツに水を入れ頭からかける遊びも, 友達を気にせずに一人で行っている。この状態は, 今まで考察してきたような相互のやりとりから離れた状態であり, 「AがA自身でそれをしている時間」と捉えることができるだろう。そして, これはWinnicottの「遊び」の概念に近い状態であり, またさらにこの状態はWinnicottの「一人でいられる能力」を獲得していると推察できる。「一人でいられる能力」とは前述したように, 「ひとりだけでふたりでいることと同時に, ふたりでいて(そばに外的な対象がいるときに)ひとりになれる(くつろぎの空間を内界にもてる)こと」であり, このシーンでは実際に外界には母親がおり, その間におもちゃという自身の所有物を介して遊んでいる。このときのおもちゃが「移行対象」となっており, AがAの中で「遊ぶこと」に集中できていると考えることができるだろう。しかし, しばらくするとおもちゃに飽きたようで, プールから出たいと母親に伝えている。これは実際の外側にいる母親を求めるといった行動 (121) を取ったと考えることはできないだろうか。

また移行対象の一つとして挙げられている, 指しゃぶりがAに観察できた。この行動も移行

(やりとり2)

- | | |
|----------|--------------------------|
| A/I (9) | 周りの様子を見つつ椅子でふざけはじめる |
| M/C (10) | 「危ないよ!」とAに言う |
| A/I (35) | 突然ミニちゃんのパン型のおもちゃを乱暴に扱い出す |
| F/C (36) | 「ミニちゃん困ってるでしょ」と言って注意する |

(やりとり3)

- | | |
|-----------|---|
| A/H (117) | プールの中にはお友達がいる。しかし, 遠目には一緒に遊んでいるように見えるが, おもちゃでひとりで遊んでいる。 |
| A/H (118) | バケツに水を入れ, 頭からかけるという遊びを繰り返す。 |
| A/O (121) | 「でー!」と大きな声を出し, 母親を呼ぶ |

対象と中間領域の関係で考察できるだろう。

このやりとりの前に、姉と母と一緒に遊んでおり、Aがそれを観察(317)している。姉はAを気にすることなく遊んでおり、母親も姉の方に対応をしている姿がある。この状態の後に以下のような行動をAは取った。(やりとり4)

Aが指しゃぶりをした後、原初語の混ざった言葉で人形に向かっておしゃべりを始めた流れは、Aの移行対象があるなかで中間領域に入り、自分の遊びができてきている状態になったと考えることができるだろう。

さらにAのカテゴリで多くみられていた<B:要求する>での口癖について考察したい。先ほどの例にも観察されていたが、Aは「見ててね」、「見てごらん」という用語を口癖のように使用している(37)(231)(235)(240)(276)(325)ことが観察された。Winnicottは(1971)「移行対象」を言葉やメロディー、決まった癖などもその一つであると述べ、乳児が組織化された音を使い始めるにつれて、移行対象をさす「言葉」が現れるときがあると論じている。これはAが母親や父親の注目を集めるために使用している言葉であるように捉えることができるだろう。しかし、<B:要求>のカテゴリ内で発生した「見ててね」の後に<K:自発的な行動>に移り、またひとりで何かしているという流れを観察することができる。ここか

ら、「見ててね」という言葉により外界の母親の注目を引き、共にあることを感じることで中間領域に入り、一人で何かをするという行動が取れたと推察することができる。(やりとり5)

5-1-2 Aの特徴的な行動

頻繁に観察されたやりとりではないが、特徴的な行動がAに観察された。この様子をKleinの幻想の理論で考察してみたい。ここでは、食器を自分で片付けようとしたが、姉にその手柄を奪われてしまっている。この時にAは癩癩を起こさずにはうっとした様子で、姉を観察している。すると次に、そこには存在しないダンゴムシの存在を母親に向かってアピールしているのである。このダンゴムシという幻想が発生した理由としては、幻想を使って防衛的な側面が現れたと推測できないだろうか。H, Segal(1973)は外的現実に対する欲求を満たすことができないと幻想を防衛的に用いることがあると述べており、このやりとりはAが欲求を満たすことができなかつたゆえに発生した幻想であると考えることができるだろう。(やりとり6)

次にAと姉と午前中の【遊びの時間】に参加する友達とのやりとりについてである。Aは姉が幼稚園で過ごしている時間を除いては、姉と一緒にいる。昼食の時間や、午後の遊びの時

(やりとり4)

- | |
|--|
| A/K (324) 指しゃぶりを始める |
| A/C (325) 「見てごらん」と自分の人形を母親に見るように言う (変な風な髪型とお化粧をしたので母親と姉が笑う) |
| A/K (326) 若干原初語の混ざった言葉で話しだす (人形に向かって) |

(やりとり5)

- | |
|--|
| A/B (235) お豆が掴めている様子を、母親や姉に見せようと「見てごらん」と言う |
| A/K (236) 運ばれてきた揚げ物に手をつけようとする |

間、夕食の時間と多くの時間を姉と同じ空間で過ごしている。しかし、この中で姉との相互的なやりとりは少なくAは一方的に<L:真似をする>(204)(206)(213), <M:注視する>(250)(275)という行動をとっており、姉はそれには反応せずに自分の行動を続けていることが観察された。また、頻繁に観察されなかったが、特徴的なやりとりとして【食事の時間に】姉と<P:喧嘩をする/争う>カテゴリ(223)~(230)が観察された。また午前中にA宅にやってくる 友達との【遊びの時間】にも同様にこのカテゴリ(119)(131)(142)が観察されている。(やりとり7)

このやりとりは自身の所有物の対する主張や、その所有物を奪われたときにその反応が観察できる。この争いはA自身の所有物である「移行対象」に侵入されたり、奪われたときの不快感や怒りとしての行動であることと推察することができるだろう。

以上の考察から、言語を獲得しているAの日常のやりとりは言葉を持って行われており、Sternの4つの自己感の「言語自己感」の概念が中心となっていることが示唆された。また Winnicottの「遊ぶこと」の理論が多く適合さ

れるやりとりがAの1日の中に現れていることも推察できた。頻繁には現れなかったが、興味深いこととして不快な状況で起こるAの幻想的な体験はKleinの理論にも通じるところがあるだろう。

5-2-1 母親とのやりとりの考察

母親は【食事の時間】と【遊びの時間】含め、ほぼ1日中Aと関わっていることが観察され、そのやりとりの多くは、<B:要求する>, <J:介入する>, <N:教える>といったカテゴリが多く、言語的な応答が大半である。(やりとり8)

この言語的なやりとりは、言葉が増えてきたAに対する教育的指導の影響があると推察できる。

また、Aと母親の2人だけになる時間が幼稚園に姉を送った帰り道にある。この時間も<G:質問する>や<E:返答する>の言語を使用したやりとりが中心になっている。(やりとり9)

また午後の【遊びの時間】は<I:一緒に遊ぶ>ではなく、こちらも<G:質問する>, <J:介入する>などのカテゴリが多い。(やりとり10)

(やりとり6)

A/K (194) 食べ終わった皿を姉の皿も取って重ねる
 S/M (195) 先に重ねられた皿を奪い、母親の渡す
 (この時Aに癩癪はないが、ほうっとした様子で姉を見ている)
 A/C (196) しばらく自分の手を観察しているが、何かを見つけたように、「みて~ダンゴムシ」と母親に言う
 (実際にはダンゴムシはいない)

(やりとり7)

A/P (119) Aが友達のおもちゃに興味を持ち、何も言わず奪う
 A/P (131) 各自、思い思いに片付けていたが、同じおもちゃを同時に拾ってしまい掴み合いになる
 A/P (142) 友達が使おうとしているクーピーを独り占めしようとする
 A/P (42) 「ピンクー！」とそのおもちゃの所有権を主張する

(やりとり8)

- | | |
|-----------|---|
| M/B (13) | 「お片付けしてきて～、パズル終わったの」と伝えながら、姉の朝の勉強の様子を見ている |
| A/E (14) | 「終わってない」と伝える |
| A/A (139) | お友達が勝手に使い出したハサミを見て「いいよって行ってない！」と使用を拒否し、怒る |
| M/J (141) | ぐずるAをなだめる |
| A/B (197) | 野菜の水切りの道具をやりたいと手を伸ばす |
| M/N (198) | グルグル回すのは10回ねと教える |

(やりとり9)

- | | |
|-----------|---------------------------|
| A/B (90) | 傘がなかなかさせないため「できない」と言う |
| M/G (91) | 「できないの？(私が)開く？」と言って傘を受け取る |
| M/B (94) | 車が来ているために「止まって」という |
| A/F (95) | 話を聞きながら止まり、車の観察をする |
| A/E (100) | 「あっちいった」と興奮気味に母親に伝える |
| M/E (101) | 母親も笑顔で「いったねー！」とAに伝える |

(やりとり10)

- | | |
|-----------|---------------------------------|
| M/G (110) | 「今日は何をする」と会話をする |
| M/J (134) | 泣き声を聞きつけてやってくる どうしたのと争いに介入する |
| M/G (153) | 「塗り終わった？」とAに質問する |

これらのやりとりから母親は1日を通し、Aに対して教育的指導を中心に関わっていることが推察される。このことから言語による教育的指導は、Aの「言語自己感」を活発に促進させるものであることが推察できるだろう。

またAの考察で記したように、Aは母親と共にありながら一人で遊ぶことができると推察される。これを母親の視点から論ずると乳幼児期に「母親の原初的没頭」が達成されていたと考えることができ、このことから、現在Aが移行対象を用いて中間領域で遊ぶことができていると推察することができるだろう。

5-2-2 母親とのやりとりでの特徴的な行動

また母親とのやりとりの中だけに、頻繁には発生しないが特徴的なやりとりが観察されたので以下に考察していきたい。(やりとり11)

このAの行動は、母親の不在を確認するための行動であることが推察でき、遊びに集中していた中でも素早く反応していることが特徴的である。ここではパズルを一人で遊んでいるAの姿が観察でき、移行対象がある中で中間領域にいることが推察できるだろう。しかし、中間領域で遊んでいる中、突如外的な母親がいなくなると感じたAが、不安を感じとり取った行動ではないだろうか。また、これはMahler (1975)

の分離個体化理論の再接近期の行動やストレンジ・シチュエーション法の「安全型」にも当てはまるといえるが、この観察の中では頻繁に確認することができなかった。Fonagy (2001) が論じているように、分離個体化理論での「再接近期」はパーソナリティ形成の最重要期であるとされ、この時期を順調に経過できるか否かでその後の人格発達に決定的な影響を与えている。Aと母親のやりとりからは、この再接近期に発生するよう行動が頻繁には観察されなかったため、母子共に健康的に「再接近期」を通過していると推察できるだろう。また、この母親の不在を確認する行動はストレンジ・シチュエーションでの「安全型」に相当すると考えられ、こちらもAと母親の乳幼児期のかかわりが健康的であったことが推察できる。

これらのやりとりを総合的に考えると、母親とのやりとりでは、教育的指導を言語で行うことが中心であり、これはSternの「言語自己感」に適合していると推察できる。またWinnicottの理論での「母親の原初の没頭」を推察できるやりとりがあることが観察された。また頻繁には観察されなかったが特徴的な行動として母親の不在を確認するための行動が観察された。

5—3 父親とのやりとりの考察

父親とのやりとりで特筆することは、コロナ感染対策として父親が在宅勤務になったということである。この結果、Aと父親のやりとりの時間が大きく変化した。この変化により絵本などを読む【遊びの時間】が設けられるようになり、さらにコロナ禍以前は食事をA兄らと共に取ることは少なかったが、基本的に夕飯は一緒に食べることができ、【食事の時間】も共に過ごせることになった。現在の父親の在宅勤務という特殊な状況が、より多くAと過ごす時間を作り、相互の関わりが大きく変化したことが推察される。

父親のメインとなるやりとりは1対1での【遊びの時間】があるために、<I:一緒に遊ぶ>である。そのために母親と比べて大きい差が出ていることも特徴になっている。この【遊びの時間】での父親は<B:要求する>(60)(62)<E:返答する>(54)や<G:質問する>(33)(55)といった言語での応答が母親と同様に多く、父親とも「言語自己感」のもとでやりとりがなされていることが観察できた。また、この時間のAはのびのびとプレイフルに父親と交流している様子も観察されている。(やりとり12)

このやりとりをWinnicottの父親の役割につ

(やりとり11)

| | |
|---------|--|
| A/H (1) | パズルで一人遊びをしている。 姉が母へ「ママどこに行くの?」という呼びかけに素早く反応するが、母親を確認するとパズルに戻る |
|---------|--|

(やりとり12)

| | |
|----------|------------------------------|
| A/K (31) | くしゃみをする |
| K/I (32) | くしゃみの真似をする |
| F/I (41) | くすぐったり、ボディタッチをして、ちょっかいを出す |
| A/I (42) | それを受けて笑う |
| A/C (53) | 指を指しながら、父親に本を注目させようとする |
| | ※父親の膝の中で完全にゴロンとしてリラックスしている様子 |
| A/E (54) | 父親はそれに反応するような態度を取る |

いてから考察してみたい。

父親は母親と子どもという一つの単位をその外側から支えるものであり、母親が心身ともに快適過ごせるように援助し、道徳的にも支え、父親の持っている肯定的な特性や他の男性とは一味違う何かを示す（宮上ら、1996）。またこの役割は「母親の原初的没頭」や「抱えること（holding）」などを支える際に重要であることも述べている。予備調査時の母親のインタビューでは、父親がコロナ禍によって在宅勤務となりAの世話をしてくれる時間が増え本当に助かっているという事が語られており、現在の母親は例年に比べ快適に過ごしている状態であることが推察された。現在のAの<I:一緒に遊ぶ>には父親とのリラックスしたやりとりがあると思われ、Aが父親の持っている肯定的な特性を感じとれる時間となっていることが推測される。

これらを踏まえて、父親とのやりとりでも、Sternの「言語自己感」を中心とし、またWinnicottの理論での父親としての機能を説明できるやりとりがあることが推察できた。

5-4 姉、友達とのやりとりの考察

姉とAのやりとりは、<P:喧嘩する/争う>、<A:拒否>、<I:介入する>というやりとりが行われている。姉は4歳ということになり、両親と同じように言語的応答を用いてAに関わっている。しかし、この中では姉から妹に積極的に関わろうとする姿はなく、Aの行動に対し意見を否定したり（223）～（230）、拒否しその後に教示を与えるという行動（69）（89）が観察された。（やりとり13）

これは【食事の時間】の姉との間の中での昼食のシーンからの抜粋である。Aはお気に入りのプリンセスが私のものであると主張し始めた。しかし、姉も同じプリンセスがお気に入りであり、それに反論する形でやりとりが始まっている。この争いに関しては、姉妹がお気に入りのプリンセスに対しての所有権を主張するやりとりであると考えられるが、そのプリンセス

がAの「移行対象」であると考えないと興味深い考察ができる。この時の姉は4歳であり「移行対象」の時期を外れており、プリンセスという対象の使用はAと異なることが推察される。そして、この喧嘩は母親の姉に向けた介入によって治るのだが、所有権に対する決着はつかずのままであった。その後しばらくすると、Aの考察で論じた「移行対象」であると推察した口癖である「見てごらん」を言うのである（231）。ここでは、「移行対象」の獲得に失敗したAが異なるアプローチで行動していることと推察できないだろうか。この後にも「見てごらん」の反応を十分にもらえずに最終的には癇癪を起こしてしまう（233）。以上のことから、姉妹の争いは、Aの「移行対象」の獲得をめぐるやりとりが発生すると考えることができるだろう。（やりとり14）

また友達のやりとりでは、午前中の【遊びの時間】に来る友達もAと同じ歳のために、Aと同等の発達段階にいと推察される。そして、【遊びの時間】の中では、所有物をめぐる争いになるきっかけを作っていることがある。友達はAよりも言語の獲得が遅い様子が感じられ、姉のように言語的な応答を使用しないで急にAに対しての介入があるためにさらに喧嘩や争いが誘発されていることが推察された。

5-5 考察のまとめ

Aと家族のやりとりは【食事の時間】と【遊びの時間】に集中している。主なやりとりは両親によるAに対しての言語による教育的指導である。母親はAへのしつけによる教育的指導が活発に行われており、父親は遊びの中でのプレイフルな教育的指導が多くあった。Aもこのやりとりに対し言語での対応するために、日常的なやりとりはほぼ言語が用いられていると推察できた。

また言語でのやりとり以外では、Aの【食事の時間】と【遊びの時間】で、その行動に没頭し他者とのやりとりのない状態が観察された。これは他者との交流がない状態であるが、内的

(やりとり13)

A/P (223) 急に「Aはオーロラ、姉（名前）はミャーミャー」と話しかける。
 (この姉妹はディズニープリンセスに夢中であり、お気に入りのキャラクターは姉妹ともオーロラ姫である)
 S/P (224) 目を怒らせた表情にして「いや」とAに伝える
 A/P (225) 「オーロラ？ ミッキー？」とそれでも尋ねる
 S/P (141) 「オーロラって言うてるでしょ！ ミッキーじゃない！」

(やりとり14)

Friend/J (160) それを友達がとる
 Friend/J (169) 友達がAの遊びかけていたブロックをとる

な活動は活発になっていることが推察された。また、その没頭状態が終わると母親を求めるという行動も観察された。さらに、Aの生活には所有物を通したやりとりが多くある。姉の間にはこの所有物をめぐる争いが発生しており、さらに発生した回数は少ないが友人との間にも同様のやりとりが見られた。また先に述べた没頭している時間も所有物とともにその状態にいたことが観察され、ひとりである時間と所有物に関連があることが推察された。

しかし、コロナによる父親の在宅勤務の影響による在宅時間の増加や、外での遊びなどの時間が減少している状況などから、<I: 一緒に遊ぶ>のカテゴリが増加していることが推察でき、例年とは異なる環境のなかでの家族のやりとりであった可能性は考慮すべきであろう。

第6章 結論と今後の課題

6-1 結論

これまでの内容を踏まえて、精神分析理論から2歳2ヶ月であるAと家族のやりとりを総括すると以下のようにまとめることができる。

言語を獲得したAと両親のやりとりは言語的な応答を多用しており、Sternの「言語自己感」に適合される。これは両親の教育的な指導が言語を多用して行われていることと関連してお

り、言語を獲得しバーバルコミュニケーションが可能になる2歳児という時期、そして言語によって両親の教育が開始される時期とSternの「言語自己感」が発生する生後2年目という時期が同時期ということからも示唆される。

またAの所有物をめぐるやりとりの中から「移行対象」を使用したさまざまな行動が確認することができた。「移行対象」の第2のピークは2歳児とされており、またそれらの現象をAが一人でいるときの行動の流れからいくつか確認されたことは、Winnicottが論じていた理論と適合する。さらに頻繁に観察されなかったが、Aが幻想を取り扱った行動も観察された。このやりとりは幻想を使った外界、内界に対する防衛と捉えることができ、Kleinの理論も説明することができるだろう。

Bowlbyの愛着理論やMahlerの分離個体化理論については、母親とAのやりとりから分離不安を推測できるエピソードがあったが頻繁に発生はしておらず、Aとその家族は、分離不安が想起される状況が少ない健康的な家庭であることが示唆された。

またBionのコンテイナー/コンテインド理論に関して本研究では、具体的な α 機能と見られるやりとりは観察されなかった。

よって2歳児が最も適合する精神分析概念は、Sternの4つの自己感の「言語自己感」で

あり、次点にWinnicottの「遊ぶこと」の理論が適合しているといえるだろう。

6-2 今後の課題

上記の内容を踏まえた上で、本研究の今後の課題について触れてみたい。まず第1に、本研究での対象は言語を獲得した2歳児とその家族を対象としたものとなった。ゆえに、言語的な応答のやりとりが目立つ時期であり、ノンバーバルでのやりとりが多い時期を狙った観察にも着手する必要があるように思われる。縦断的研究を続けることで、現在に適合する発生論的展開を深く考察できるだろう。第2に、現在ではメディアの進歩が著しく、ビデオ記録を観察する場合には、解像度の高いビデオカメラや集音

性の高いマイク、そしてそれに対応するモニターなど最新の機種を揃え、観察し易い環境を用意することが重要であり、次回は観察機材に関しても準備の段階でその性能をチェックすることが課題となるだろう。最後に、本研究はコロナのパンデミックの中で行われ、家族のやりとりの変化が多くある中での観察となった。ゆえにパンデミック後の2歳児との比較検討と今後の変化を追跡することも課題となるだろう。そして、本研究は乳幼児から幼児の発生論に関して重要な時期を追跡研究し、縦断的な結果からの考察をしていくことが真の目的であると考えており、本研究だけの結果で終わらずに引き続き観察調査を続けていくことが大きな課題になるだろう。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Water, E., & Walls, S. (1978). *Pattern of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 青木紀久代・馬場禮子・古川真弓 (1996). 母子相互作用場面における母子の調律行動の生成過程. *心理臨床学研究*, 第14巻, 第2号, 133-140.
- Beebe, B., & Lachmann, F. (2002). *Infant research and adult treatment: Co-constructing interaction*. The Analytic Press, Inc, Publishers. (富樫公一 (監訳) (2008) 乳児研究と成人の精神分析 誠信書房.)
- Bion, W. R. (1967). *Second thought*. William Heinemann Medical Books Ltd. (松木邦裕 (監訳) (2007) 再考: 精神病の精神分析——second Thought——. 金剛出版.)
- Bion, W. R. (1962). *Learning from experience; Elements of psycho-analysis; Seven servants*. (福本 修 (訳) (1999). 精神分析の方法 I <セブン・サーヴァンツ>. 第一部 経験から学ぶこと りぶらりあ選書.)
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss, Vol. 1 Attachment*. The Tavistock Institute of Human Relations. (黒田実郎・大場 葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1976) 母子関係の理論 新版 I 愛着行動. 岩崎学術出版社.)
- 遠藤利彦 (1990). 移行対象の発生因的解明: 移行対象と母性的関わり. *発達心理学研究*, 1990年1巻, 1号, 59-69.
- 藤山直樹 (2010). 集中講義・精神分析 (下)——フロイト以後——. 岩崎学術出版社. 151.
- 藤山直樹 (2002) 「葛藤」. 小此木啓吾編著. 精神分析辞典. 岩崎学術出版. 31-33.
- Freud, S. (1983). *Zur Auffassung der Aphasien*. Sigmund Freud Gesammelte Werke Nachtragsband. (津田 均 (訳) (2007). 精神分析概説フロイト全集22, 岩波書店.)
- Fonagy, P., Target, M. (2003). *Psychoanalytic theories: Perspectives from developmental psychopathology*. Whurr Publishers Ltd. (馬場禮子・青木紀久代 (監訳) (2013). 発達精神病理学からみた精神分析理論. 岩崎学術出版社.)
- 繁多 進 (1988). 母子関係研究の展望. *心理学評論*, Vol. 13. No. 1, 4-19.
- 河合優年・難波久美子 (2008). 母子相互作用のパターンが子どもの社会性に与える影響について (2) ——マイクロ分析による4-9ヶ月の母子相互作用パターンと18ヶ月児の社会性との関連性について——. 日本心理学第72回大会, p. 1114.
- 鯨岡 峻 (1999). 関係発達論の展開. ミネルヴァ書房.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (2007). アタッチメントと臨床領域. ミネルヴァ書房.
- Mahler, M. S., Pine, F., Bergman, A. (1975). *The*

- Psychological birth of the human infant.*
Margaret S. Mahler Appendices. (高橋雅士・織田正美・浜畑 紀 (訳) (2001). 乳幼児の心理的誕生 母子共生と固体化. 黎明書房. 50-53.
- Masterson, J. F. (2000). *The Personality disorders. A new look at the developmental self and object relations approach.* Zeig, Tucker & CO., Inc. (佐藤美奈子・成田善弘 (訳) (2007) パーソナリティ障害. 星和書店 33-38.)
- 松木邦裕 (2009). 精神分析体験：ビオンの宇宙. 岩崎学術出版. 2-3.
- 松岡利規 (2019). 「自己」の感覚はいかにして生ずるか？——自己感をめぐる心理学的研究の概観と展望——. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 65号, 109-121.
- 宮上多加子・益守かづき・中野綾美・山崎美恵子 (1996). 幼児期の子どもを持つ父親役割——父親行動に影響する要因——. 高知女子大学看護学会集録, 22, 11-19.
- 小此木啓吾 (2002). 現代の精神分析. 講談社学術文庫.
- 下司 晶 (1999). アンナ・フロイト-メラニークライン論争. 精神分析の分岐点としての児童分析. 教育哲学研究. 1999号, 79号, 93-109.
- 園田奈摘・無藤 隆 (1996). 母子相互作用における内的状態への言及：場面差と母親の個人差. 発達心理学研究. 7巻, 2号, 159-169.
- Stern, D. N. (1977). *The first relationship: Infant and mother.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Stern, D. N. (1985). *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology.* Basic Books, Inc. (小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳) (1989). 乳児の対人世界 ——理論編——. 岩崎学術出版社. 188-189.
- 高橋 裕 (2014). 精神障害と心理療法「悪魔祓い」から「精神分析」, 「親-乳幼児心理療法」への概念の変遷. 307-327, 358-372.
- 牛島定信 (2004). 精神医学の臨床現場から考える. 学術の動向. 9巻, 2号, 2-3.
- Winnicott, D.W. (1965). *The maturational processes and the facilitating environment.* The Hogarth Press Ltd., London. (牛島定信 (訳) (1977). 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社. 21-31.)
- Winnicott, D.W. (1971). *Playing and reality.* Tavistock Publication. Ltd, London. (橋本雅雄・大矢泰士 (訳) (2015). 改訳 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.